

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十二年七月廿日印刷納本昭和十二年八月一日發行

第十三卷 第七號

浄土

七・八月號



目次

夕暮れの散歩……………(二)

吉田絃二郎

科學と宗教……………(八)

谷川徹三

盆踊雜感……………(四)

石川迪夫

筆隨夏銷

梵鐘の功德……………(六)

相馬黒光

信仰相談……………(二)

中村辨康

大いなる愛……………(一四)

東しげと

編集後記……………(一六)

法然上人鑽仰會發行



夕暮れの散歩

吉田 絃 二 郎

このごろ、アメリカから来たパアロツト夫人の動物に對する愛情の深さに就いて感激したことがある。

パアロツト夫人はいつも外出のをりは小ひさな鞭を携へてゐる。そしてたま／＼道に牛馬車を曳く男たちが家畜を鞭打つてゐるのを見ると、直ちにヂープを停めて、出し抜けに彼等の肩を鞭で叩く。啞然たる彼等に「痛いか？」と問ふ。彼等は「痛い」と答へる。

「鞭で打たれたら家畜も痛いにちがひない」といふことを冒頭にして夫人の動物愛護の説法が始まる。また或る時は背にひどい傷痕のある牛を見て、夫人は自動車を跳び降り、傷の原因を訊ねた。傷は焼夷弾に因るものであつた。夫人は牛飼ひの家を記して置き、牛のために火傷の藥を送りとゞけてやつた。

夫人は説法するばかりでなく、自分で牛の曳き方、手綱の取り様を教へる。

或る時は京濱間を走る間に、ものいはぬ畜類のために

ヂープを二十回駐めたこともあつた。日本に来て數ヶ月の間に、夫人はヂープをとゞめたこと四百回に及ぶといはれてゐる。

日本にも昔から光明皇后のやうなお方もあり、また實朝のやうな畜類をいたみ、切々たる歌をうたつた歌人もゐる。またわたくしたちの周圍にも、かの犬を殺せ犬を殺せと叫ばれた戦争時に、自分の食を削り、わが身を裂くほどにしてものいはぬ畜生をかばひつゞけた人たちも多い。

たゞ日本人の缺點としてパアロツト夫人のやうな積極性に乏しい。これ等の缺點が、社會運動としての慈善事業などに潑刺たる成果をあらはし得ない原因であらう。

×

今日は小學校時代の友人が二人訪ねてくれた。一人は陸軍騎兵大尉で、民間人となり、六十三歳にして妻を失ひ、孤影悄然として故郷に歸り、せめて死ぬる日まで晴

釣雨耕を楽しみたいといふのである。かれの半生は釣であつた。かれはその生涯の勤勉の結果として九軒の家屋を所有してゐた。しかもその八軒を戦火に失つた。かれは最後に遺された一軒を賣り、その一部を以て故郷に小じんまりした家を買ひ、残りの金を以て死ぬまでの生活費に宛てようといふのである。

他の一人の友人もほゞ同じやうな事情で、これも故郷に歸るといふのである。小學時代から二人とも人一倍勝氣であつただけにかれ等の言葉は一しほ寂しかつた。

チエーホフの「櫻の園」の斧の音がそこにもこゝにも聞えるやうな氣がする。

二人の友人は宗教などといふことから、おうよそ縁遠い存在であつたが、さてかうやつて話してゐると、その聲は悲壯であり、その調は寂然たるものがある。人間は結局大死一番底の生活境に追ひ詰めらるれば、尊い姿になるものと思ふ。敗戦の苦惱は幾多の人を羅刹の徒にした。しかしそれと同時に幾多の菩薩を育て上げた。

×

夕方多磨の田圃を歩いてゐたことがあつた。寒い冬のころであつた。

枯れ葦の中から一番ひの鴨が飛び出して行つた。

鴨はすでに埒についてゐたのであらうに、追はれてはさらに今宵の巢を探さなければならぬであらう。氣の毒

なことをしたと思つた。

×

夕方わたしは多磨の田圃を歩いてゐた。青田のころであつた。

稲の間からたゞ一羽の千鳥に似た小鳥が飛び立つて行つた。

わたしは氣の毒なことをしたと思つた。小鳥は新たに今宵の埒をさがさなければならぬであらう。

日はすでに暮れかゝつてゐる。小鳥の困るであらう姿が目にはかぶ。

×

夕暮れの散歩は楽しけれど、埒を失つた小鳥のことを思へば寂しい。

今年の干魃で畑の隅の二株の牡丹を枯らしてしまつた。毎日畑の中を歩いてゐながら、牡丹の弱つてゐることに氣づかなかつた自分の不注意と不親切を後悔しても追つつかない。

けさは早く起きてバケツに水を掬んで行つたが、牡丹は回生の望みはない。

しかし今日は午後になつて幾十日振りかの雨が降り出して、畑の隅の枯れた牡丹に降りそゝいでゐる。

牡丹に對して洵にすまないことであつた。

盆 踊 雜 感

石 川 迪 夫

盆のお月様まん丸こでまるい
まるてまん丸こてまだまるい。

踊り踊るなら品よく踊れ
品のよいのを嫁にとる。

これは幼い頃母の背で聞いた子守唄の想出と同じように、少年時代に甘い回想のなかで私をしてその懐かしさに恍惚たらしめる盆踊唄の一節である。澄み切つた月下、月影を踏んで手拍子、足拍子、太鼓の音に面白く踊り狂う素朴な村人達の、心から打ちくつろいだ姿が、四十歳を越した今でも、私にはまざまざと懐かしく思ひ出されて来る。遠く置き忘れてゐる古里ではあるが、盂蘭盆のめぐり来る度毎に、私の心の中には古里の鎮守の森とともに楽しかつた盆踊の月夜が思い出される。それほど盆踊は農村に生れ、農村に育つた者にとつて一年中での一番楽しい行事であり、忘れ得ぬ思出の一つでもある。

何一つ娯樂機關とて持たない農村にあつては、年に一度の盆踊こそは、唯一の娯樂として、何れの土地でも、老若男女を問わず、鎮守の森、寺院の境内、村の廣場や辻々で行なわれる萬人の和樂、團樂の世界であるのだ。



盆踊の濫觴は果して何時頃のことであらうか。盆踊の名に相應わしい形式でそれがはじめられたのは、應仁の頃、又は永正年間であらうというのが諸家の一致した意見ではあるが、然し盆踊そのものの起源は全く不明で、或わ太古から行なわれていたものであるかも知れない。由來、太古の人間の殆どすべては、人間が死すると其の靈は不測の魔力を得るものと信じ、若し死者の靈の怒りに觸れたならば、恐ろしい報復を受けねばならないものとして、その魔力を怖れた。そこで、死者の靈を慰さめ、喜ばしめ、その怒りを買うことのないようにとの考えは、色々な形の上で現わされたが、わけても所謂宗教踊りと呼ばれるものの如きは、その尤たるものの一

つであつた。こうした意味の、死者の靈を慰さむる宗教踊が、古くからわが國にも存在していた筈であり、それが時の流れと共に幾變遷しつつある間に、佛教の年中行事の一つである「魂祭り」「精靈祭り」と呼ばれる盆會の行事と結合して、陰曆七月十五、十六日を中心として行なわれるようになったものではないかと考える。

元來、盆踊はこうした原始宗教の意義を含んでいるのであるから、踊る場所も、神社とか寺院とかの境内で行なわれるものが元で、わけでも神社の境内で行なわれるものが最も古い形と思われる。長野縣下伊那郡豊村字和合では、先ず最初に鎮守の境内で踊り、それから踊子一同揃つて寺院に向つて出發し、更に寺院の境内で盛んに踊られているが、この例などは實にこの間の事實を暗示しているものではなからうか。踊る場所の變化が、やはて盆踊の意味の變遷を、われわれに物語つてくれているように思われる。

數多く唄われている盆踊の唄も、内容的に見る時は、二種類に大別することが出来る。即ち敘事詩的内容を持つ長篇のものと、抒情詩的内容を持つ短章のものとの二つで、前者はくどき唄と呼ばれるものであり、後者は大抵近世調の七七五形を取るものである。もともと盆踊

は、はじめは囃子だけで、歌詞はなかつたものと考えられるが、その後大衆の欲求とともに、幾多の無名の民衆詩人達によつて多くの歌詞がつくり出され、それが大衆の共鳴を得て盛んに踊り、唄われるようになったものであろう。

終戦後二度目の新曆の盆を迎え、今年も亦東京では、各盛り場を中心に、納涼大會と稱する盆踊が盛大に舉行せられたことは、誠に喜ばしい現象ではあるが、踊子は何れも國民學校の女兒が主を占め、大人の参加は殆ど見受けられず、相も變らず東京音頭並びに其の替唄が繰返されているのを見て、私は少なからず残念に思つたことである。元來東京音頭が流行したのは昭和八年のことである。あの當時は物質生活にも、精神生活にも何となく不安がつきまとい、大きな聲でウツカリ話も出來ず、殺伐な事件が相次いで起つて人々の心をイライラさせた時代で、當時における東京市民の心の憂さの捨て所が凝つて東京音頭となり、精神的にも、肉體的にも人々は東京音頭によつて自己解放を行なつたのであつた。然し今日は食糧問題、經濟問題等の不安はあるにもせよ、あの當時とは全く異なり、滑稽な程の官權の壓迫もなくなり、精神的にも、社會的にも眞に解放せられた時代である。民衆的精神に基づき、楽しく明るい日本を建設すべき時代

筆 隨 夏 銷

であるのだ。盆踊が復興せられただけでも其の意義は深いとは言えようが、もつと歌詞にも、又踊形式にも、凡ゆる人々が進んで参加し得られるような何等かの方法が取られ得なかつたであらうか。これから舊盆が近づくにつれて、各農村に於ても、昔懐かしい盆踊の催しが企てられることであらうが、この點を特に考慮して貰いたいものである。性別を問わず、凡ゆる年齢の、凡ゆる人々

梵 鐘 の 功 德

相 馬 黒 光

が、みずから唄い、みずから踊る所に盆踊の眞意があり價值のあることを、特に農村の指導者達に銘記して貰いたい。

盆が來たのに踊らぬ奴は

木佛、金佛、石ぼとけ

古民謡は、かく盆踊の楽しさを、後世のわれわれに教示している。(七月二十二日夜)

日本人の生活からお寺の鐘をとりあげたら一體どうなるであらう。想像しただけでも慄然とする。それなのに戦争中はどうであつたらう。鐘は一切鳴らす事を禁じられ、それどころか全國の鐘という鐘は悉く徵發され大抵兵器として形を造りかえられてしまつた。その中には所謂名鐘として藝術的にも素晴らしく立派なものも數多くあつたという。これはやむを得ないことではあるが。

私は今、鐘の由來とか歴史とか藝術的にどうかを云々するつもりではない。ただ昔から日本では、この鐘により、どれほど人間の情操が培われて來たかその功德を

今新しく思い起したいのである。全國津々浦々に朝夕鳴りひびく梵鐘こそは、しらすくの間になれくの宗教心を呼びさまし、詩の心を養い、人生に潤いと溫味と平和とをもたらしただけではあるまいか。

都會はあまりに騒々しく靈妙な鐘などは消されがちであるけれど、それでも、つい最近まで鐘は上野か淺草かで、心ある人は、鐘が鳴ると、何ともいえぬなつかしさと、ありがたさに、つい急ぎの足を止めてジーツときゝ入るのであつた。殺風景な下宿生活をしている學生も、あの鐘をきくと、しみじみと郷里の父母が戀しくなり、

わびしい部屋に一夜の夢をむすぶ旅人も妻や子が一しお
いとしくなる。

有名なミレーの「晩鐘」の繪を今一度思い浮べて見よ
う。野良に働いていた若い農夫たちが村の教會堂から晩
鐘が鳴ると、鍬を捨て靜かに頭を垂れ手を組んで夕の祈
りを捧げる、あの敬虔な場面を、繪はありふれた田園の
一風景に過ぎないけれど、何と莊嚴な宗教畫ではあるま
いか。

終戦後再び除夜の鐘もきけ、平生でも、たまにはお寺
の鐘をきかれるようになつて久しぶりに祖國にかえつた
ように嬉しくありがたいと思う。私は武藏野の一角に疎
開生活を續けているが、近頃は窓を開けておくためか、
毎日三度この梵鐘をきいている。近所の人にきけば深大
寺の鐘でしようという。風の方が變るときゝもらすこ
ともあるが最近は今四時半頃ゴーンと霧の奥から露を
ふくむ空氣をふるわせて鳴りひびく。正午前再び鳴つて
日中の合掌を促される。日、將に草原の彼方に没せんと
する七時少し前三度ゴーンと莊重なひびきを傳えて來
る。私は三度合掌して西方の莊嚴を心に描く。かくして
小鳥は塙に、人は家路にと急ぎ今日一日の安息を求めん
とする。

何年前であつたか増上寺前法主大島徹水上人のお伴を
して深大寺に參詣し有名な釋尊の御像を拜したことがあ

る。案内してくれた若僧は勿論法主など、知らないのだ
が、先ず恭々しく心經を讀誦して然る後靜かに開扉され
た。その謙虛な態度に私は頭が下るのを覺えたのであ
る。當時と現在の御住職とは同じ方かどうかかわらない
けれど、梵鐘の復活と云い開扉前の讀經と云い近來稀れ
に見る宗教家らしい宗教家でいらつしやると心から尊敬
をささげるものである。

現代に於て毎日一定の時刻に鐘を撞くということは、
いろ／＼の點で極めて困難であることは容易に察しられ
る。然るに深大寺は萬難を排して實行していられるので
ある。月並なお説教より一ト撞の梵鐘が奈落の底から人
を救い上げるのに効果があがる場合もありそうに思われ
る。そして鐘は必ずしも寺院ばかりとは限らない、カト
リックの教會堂の鐘でもよい、毎日時を定めて鐘を鳴ら
して下さつたら、どんなに人の心が和やかに、美しくな
るであらう。それには現在あるがまゝの姿で、即ち野良
でも職場でもお台所でも往來でも鐘が鳴つたら一人残ら
ず一時手を止めて、合掌或は十字を切るなり、各自思ひ
／＼に神佛に禮拜し感謝をささげるような世の中になつ
たら修羅場は忽ちにして淨土に、地獄は天國と化すであ
らう。(編輯部追記、昨年か増上寺でも明六ツ暮六ツの鐘を
ついて居ります)

科 學 と 宗 教

谷 川 徹 三

聯合軍が進駐して以來、私たちは外國人に接觸する機會が多くなつたが、それに付けていろいろのことを考えさせられる。

私は日本民族の優秀性を疑はないが、しかしアメリカ人が弱點をもっているにかゝはらず、その勝れた社會的訓練は私たちの持たない美德として切實に胸をうつ。たしかに日本人に缺けている特性である。知人からこんな話を聞いたことがある。進駐早々、アメリカの兵士が或る呉服屋で反物を見せてくれとはいつて來た。主人は恐るおそる反物を彼等の前に差し出したところ、彼等は商品の反物によごさないように、手をきれいにふいて手にとつた。主人はその奥床しい態度におどろいたが、その中一人の兵士が萬年筆のインキをぼたりと疊におとした。するとあはて、純白のハンカチーフをとり出して惜しげもなくふきとつた。恐れてゐた主人はこれを見てすっかり感心してしまつた。日本人だつたらどうだらう。反物を手にする前に手をふく日本人

があるだらうか。インキをすいとるために新しいハンカチーフを犠牲にするだけの公徳心をもつてゐるだらうか。しかもそれが自然に行はれて見ていて氣持がよくなるのである。

歐米では赤ン坊をよく一人ぼつちにする。泣いてゐてもかまつてやらない。日本人から見ると愛情がないやうに思はれるが、彼等には人は見てゐなくても神様が見てゐるといふ信念がある。それで赤ン坊もいつの間にか泣きやむが、かうした中に民主的な精神が養はれてゆくのである。また彼等は自己の職業を貴いものと考えてゐて、職務には實に忠實に正確に働くが、これも職業は神によつて召されたものであり、また人は見てゐなくても神がたえず見てゐるといふ信念にもとづくものである。即ちアメリカ人のすぐれた社會訓練はキリスト教の大きな影響によつて生じたものである。

日本人が今後みじめな境界を脱却して世界

の中に交はり一つの役割を演ずるためには、何等かの形で社會的訓練に強力に堪えるものを文化の地盤の中にもたねばならないが、私は宗教的情操こそかくべからざるものと思ふ。佛教の傳統の社會化、キリスト教の生活化、これなくしては日本の再建は望めないと思ふ。米國の一航空中佐は日本の淺薄な宗教否定の人々こそ、日本再建をはむ危険な存在であると語つたが、戰時中に科學を壓殺して神がかりをしひたと同様に、科學をおしつけて宗教を否定することは、全く再建途上の日本にとつて致命的な害惡である。それぞれ分野の意義をはつきり認識し充分にその役割をはたさすべきである。西洋のルネッサンス時代のヒューマニズムは宗教に反抗するこゝとであつたが、今日の日本では宗教の側より科學の傲慢に反抗することがヒューマニズムである。即ちヒューマニズムとは人間完成のため作り出された文化の諸領域がその一つの領域によつて不當な壓迫を加えられた場合、均衡をとり戻さうとする運動だからである。科學と宗教は人間完成のためにそれぞれの分野と目的を有する異つた領域である。従つて限界がある。科學と宗教の限界を知り、その各々の分野を保たせることこそ兩者を生かす

道であり、こゝに現實日本の大きな問題がある。

二

しからば人間完成のための文化の領域とは何であるか。私は分りやすく文化の基本構造を八面體として考へてゐる。即ち六つの頂角に政治、經濟、科學、宗教、藝術、哲學の六つの文化領域をあてはめ、その中心に人倫をおく、それぞれの頂角にあるものは、力によつて成立する、宗教や科學の力の變化により八面體の形は變化する、即ち時間の流れにより歴史的社會的に變化するのである。力の割合により強い力は他の分野に影響を及ぼす。従つて戦ひがおこる。或はとけあひ、或は反撥しあひ、矛盾した關係にたつ時もある。

文化領域は人類生活の法則に従つて歴史の一段階に成立したものであり、それぞれの分野と目的を有するものであるが、一度分野が確定されると論理とメカニズムの自己運動により獨立性を有するようになる。しかし文化とは人間の道といふ具體的内容を持つたものであり、人間の作つたものであり、人間の完成を目的としてゐる。眞に人間にとつて自己目的となるものは人間と人間の完成である。従つて人倫こそ文化の基礎である。然るに先に

あげた諸領域は自己目的的とは言えない。科學者は科學を自己目的的と考へてゐる。事實

かく考へる人こそその分野で立派な仕事をすることが出来る。藝術のための藝術、科學のための科學といふごときは、かゝる考えから生れるものである。しかしこれは生活の必要のために作られたにも拘らず、自己運動をすゝめる一つの場合にすぎないもので、人間の完成世界の實現はそれだけでは完成しない。この諸分野は完成のための媒介となるものである。或る時代は特に宗教をもつて、或る時代は科學或は政治、經濟等々の媒介によつて人間は自己を實現しようとするものである。即ち六頂角の各分野は自己完成の媒介をなすもので、時代によつて大きくなり小さくなり、意義をもつものともたないものが現はれる。西歐の中世は宗教が他の分野に巨大な影をなげかけた。今日は科學が強い力をふるはうとしてゐる。かゝる場合には全體の均衡が破れるので、人倫の立場から均衡をとり戻さうとする運動が必ずおこるものである。それがヒューマニズムである。宗教時代には神に對して人間を主張するが、今日の場合には機械文明に對して人間の立場から宗教の側からプロテストされなければならない。

これが今日の意味に於けるヒューマニズム運動である。

三

文化の諸領域は、それぞれの方法で眞理を追求し獨自の力でその答へをもつてゐる。諸他の領域は除き、宗教と科學の眞理の在り方を考へてみよう。

宗教では最初に眞理が與えられる。佛教では釋尊の言葉、キリスト教ではイエスの言葉これが究極の眞理として定立されてゐる。従つてこの世界では舊い新らしいは問題にならない。進歩も本來存しない。教義の發展、信仰の變化はあるが、聖書なり經典のいかなる言葉が眞なるかを判斷解釋したものが教義であれば、教祖の言葉が基本であり、前に進むやうで實は後にかへつてゐるのである。かゝるものが宗教の眞理の在り方である。

然るに科學の眞理は永遠の彼方にあるもので、一步一步それへ向つて着實に進むのである。言ふまでもなくこの眞理とは二プラス二は四といふが如き個別的な眞理ではない。かゝる個別的眞理では世界とは何であるかの究極的な問ひに答へることはできない。科學は一步一步個別的眞理を發見して不明なものを明白にするが、然しそれ以上にまた不明なも

のを作り出す。分つた世界の圓周に従つて暗がりは廣くなるのである。かく科學は一の問題をときあかしつゝ次の問題へはいり、問題から問題を追求し永遠の眞理へ進みゆくものである。換言すれば問ひがなくなれば科學はないので、宗教と異つて進歩の概念、舊新の思想が絶大な眞理をもつてゐる。新らしい眞理のみが科學では眞理で、新らしい眞理の發見によつて舊い眞理は力を失う。進歩の概念はパスカルからはじまる近代の產物であるがサン・シモン、コントの流れをとつてダーウインの進化論によつて決定的となつた。進歩は價值概念であり、進化は自然概念であるが進化論が進歩の概念を常識化した。進歩を否定し逆に末世思想を説く宗教の歴史觀にかはつて進歩の思想を常識化したのは、全く科學的世界觀の勝利であるが、かくの如く宗教と科學では眞理の在り方が異なるのである。

この兩者にあるものが哲學である。哲學は一方では科學に、一方では宗教に通ずる性質をもつてゐる。カントを例にとると、十九世紀に新カント學派が「カントに還れ」といふスローガンをかゝげたが、これは科學の世界では言へないことである。こゝに宗教と哲學の通ずる道がある。然しこのスローガンのカ

ントに還ることはカントを超えることでなければならなかつた。こゝに哲學が科學と通ずる道がある。宗教改革に於けるルーテルの「スローガンは『聖書に還れ』であつたが、キリストを超えよとは言へなかつた。冒瀆であるからである。かく祖にかへることと超えることが同時に成立する所に哲學の立場がある。従つて哲學には古いものと新らしいものがあるので、永遠に新らしい教祖をもつ宗教と今日までのつみ重ねられた發展の上にたつ科學との眞理の在り方をかね備へてゐる。

四

戰時中、教學といふ言葉が壯んに使はれた。この概念は宗教の眞理の在り方を科學におしつけたものである。教と學との二つを含むと考へた人もあるが、學を教の一本でつゝんだものであつた。教とは開くより外にしかたのないもので、眞理が先立つて與えられるものである。従つて與えられたものに聽従するより外に態度はない。然し科學は前に述べたように絶えず問題をおつけ、眞理を可能態として認めるもので、科學的精神の前には神聖なものはない。若し科學に制限を設けたら科學の進歩はなくなる。教學の考へは科學に制限を與えた。西洋では中世の宗教萬能時

代に地動説を唱へたガリレオを聖書に書いてない説を唱へて人心を惑はす者として罪にふした。キリスト教の創造神の神話と自然科学の研究とがくいちがつたのである。日本の科學壓迫はかゝる形はとらなかつた。日本神話の本質は國家神話にあり、その中核は天孫降臨にある。教學の概念は國家神話によつてメ繩をはり、歴史や社會科學の研究にはこ先がむけられた。

今日ではかゝる概念にわずらはされることなく總らゆる問題を自由に研究することができる。しかし制限をとかれた反動として科學萬能となり、文化の分野に大きな力をふるひ科學の在り方を宗教におしつける傾向が見える。また誤りである。即ち科學にあつては眞理は究極的でない。かゝるものがその眞理の在り方を他の分野におしつけることができようか。

特に人間の魂の問題に科學が眞理をおしつけることは到底出來ないところである。宗教眞理の中にある科學的矛盾をあばくことはいゝが、客觀的認識をたてまへとする科學が、主體的自覺を目ざす宗教の領域に力をふるふことは越權である。眞實の科學者、例えば現代物理學の二大支柱である相對性原理のアインシュタインや量子論のプランクは、科學の限界を知つており宗教の世界を認めてゐる。即ちぎりぎりの所まで科學をきはめた人だからである。(文責在記者)

こんな信仰でよろしいか

擔當 中村 辨 康

(問)

初め私は眞宗の信仰に入りました。眞宗では信心が往生の正因で、信心とは佛の御名を承つて心に發起するところの一念の信であつて、それを金剛の信とも他力廻向の信とも云ひ、若しこの信を得なかつたらいくら念佛申しても駄目だとの事で、随分煩悶を致しました。お耻しいことながら「信ぜよ」信ずる者を救ふぞ、頼めよ」頼む者を助くぞ」と云ふ仰せを承りましても大信心の心境に至る事が出来ず煩悶はいつしか悲歎となりました。處が不圖したことから法然上人の一枚起請文を拜見致しました。惱める私は言ひ知れぬ喜びを感じ暗黒の中に曙光を認めることが出来ました。そして更に上人の御消息

を拜見させて頂き大まかながら念佛爲本の義を知らして頂き、素直に「南無阿彌陀佛」と毎日奉唱させて頂いて居ります、承りますと法然上人は日課七萬遍の念佛をなさつたさうですが、私はお耻かしいことながら目下一日一萬遍程しか稱へられません。如何でせうか。口稱念佛は往生の業であり一聲の念佛も捨て給はぬと承つてはおりますが、念佛にやはり多く稱へた方がよろしいでせうか。また浄土宗義では「三心具足して念佛せよ」と云ふらしいですが、之をどう云ふやうに心得たらよろしいでせうか。尙ほこの外に心得なくてはならぬことがありましたならば詳しく御教示下さい。一枚起請文の中に「南無阿彌陀佛にて往

生するぞと思ふ心に籠り候」とありますので、強いて自分の心に發得しやうと努めたことはありませんが、現在の心境は「自分の無能と罪惡とを知らして頂き本願の深きを信じ念佛を申して次の世には必ずお浄土に生れさせて頂きたい」と願望して居りますが、これで三心具足と申せるでせうか。尙ほ今の信ずると申したのは眞宗の申されるやうな特殊的な深刻な信でなく普通に云ふ常識的な例へば子供が先生の言葉を信ずるやうな信じ振りでよろしいでせうか。私は病弱な身で何時此世の縁が盡きるかも知れぬと覺悟して居りますが、易行易修の浄土教に合せて頂きました幸福を喜んで居ります。然し以上申したやうな信仰で萬一往生

の目的を失ふやうなことはないでせうか、入信して日も浅く且つ一度も御指導を蒙つたことがありませんので時々不安の念に馳られることがあります。之等の點について特に御教示賜り度、長文になりましたが何卒よろしく願上ます。

(京都・東山・今熊野・高山奥)

(答) 信仰と云ふ字が示すやうに、無論信仰心が重なるものではありますが、信さへあればよいと云ふ考へも一方的であります。信行具足するのが信仰の事實であるからであります。但し行と云つても聖道門で云ふやうな六波羅蜜とか坐禪觀法とか云ふものでなく、唯だ佛の御名を唱へることとありますから、實は行と名付くることさへ嗚呼がましいと云ふ

考へなればまた違つた議論にもな
りますし、また一切の行爲を如來
様の思召に依て爲さしめられて居
るとする即ち如來回向に依る行爲
と見るならば、信だけでよいと云
ふ解釋も出て来る譯でありますが
然し心で思ふことがそのまゝ言葉
や動作に現はれるのは人間の通有
性であつて見れば、その最も簡單
な作用としての聲即ち唱名を「行」
と見ることは決して無理ではない
と存じます。これは互に誘引され
て行くもので、法然上人も「信を
以て行をすゝめ行を以て信をすゝ
める」と云つて居られます。です
から信を得ない内は本當の念佛で
ないとも云ひ得られますが、然し
信前の念佛も決して無駄ではない
のであつて、この信前の念佛があ
つて初めて信仰に導かれるのであ
ります。眞宗流に言つても「聞思
修の三慧」が含まれて居ると言へ
ます。即ち我が申す念佛ですが我
が耳に聞えて来るのは如來様が

たその御名が私の耳に聞えて來た
のであり、それに依て色々と考へ
させて頂いて（思慧）段々と心が
純化して来る（修慧）からであり
ます。眞宗ではのちになつて念佛
は「行業」でないやうに考へたら
しいですが、然し初めの頃はやは
り「行」であり「業」であつたや
うです。歎異鈔には「念佛は誠に
淨土に生るゝ種にてはんべらん、
また地獄におつべき業にてはんべ
らん」とか、又は「自餘の行を勵
みても佛になるべかりける身が念
佛を申して」とか云つて居るやう
に淨土に往生する業であり種であ
り行であると考へて居たのです。

無論眞宗には日課と云ふのはあ
りませんが、毎日若干宛でも稱へ
て居ればそれが即ち日課であつて
別段のことともありません。要は毎
日忘れなければよいわけです。こ
れは三心四修とある四修の中の
「無間修」に相當するものです。
本當に信じた人は理想的に言へば
一年中如來様のことが忘れられな
いのです。これを「不離佛值

の念佛の氣持で充分解釋が出来て
居りますから敢へて申上げなくて
もよいと思ひますゆへ略させて頂
きます。

次に信と云ふことは如來様の
慈悲でましますことを信じ得れば
よろしいのです。大慈悲を信ずる
が故本願をも念佛をも信ずること
が出来からずです。

また決して不安になることはあ
りません。如來様の慈悲を信じ
た限り最早やどうすることも出来
ません。泣いても笑つても如來様
の大慈悲の中にスツカリ包まれて
しまつて居るからです。如來様の
大慈悲は天地一杯に充ち満ちて居
るのでから、實は信ずる信じな
いの區別はないのであつて皆な救
はれて居るのです。それがこちら
で氣付くか氣付かないかで順次生
もあり順後生もあり順々後生もあ
るのであります。順次生とはすぐ
淨土往生することです。順後生と
は何時か知らぬが屹度往生するこ
とです。それだけの違ひです。信

仰の問題はむつかしいから分りにくい點もありませうが、既に信じ何でせうか。

邊地胎生とは？

(問)

佛智を疑ふものは邊地疑城胎宮に生ると申します

が、佛智を疑ふとは本願を疑ふことなのでせうか、本願を疑ひながら往生することが出来るでせうか。またこの邊地とか胎宮とか云ふのはお浄土の一部なのでせうか。又科苦を受くる所なのでせうか。(京都・今熊野・高山奥)

参考までに申上ますならば、眞宗では信をやかましく云つて居るために、念佛を申しながらも半信半疑の人とか、又は念佛を申すのに若干自力的の氣持の脱け切らない人とか(それは本願の眞意をよく知つて居ないから)九分九厘或は七八分は信じて居るとしても、まだ卵の殻がお尻にくつついて居ると考へられるところから、報土としてのお浄土へは行かれないけれどもそのお浄土の近所までは行かれる、それはまた蓮花の中に包まれて居る状態で目も見えず耳もきこへず丁度まだおなかの中に宿つて居ると同じであるとして胎宮と云つたのです。邊地と云ふのは都

(答)

會の中心地でないこと、即ち浄土の眞中でない端しこであり郊外である云ふ意味です。また疑城とは胎宮と同じやうに城の中にとちこめられて居ること、その原因は「疑」があつた爲であるからさう云ふ名にしたまでのことであります。無量壽經の中には「その胎生の者は居る所の宮殿が或は百由旬の大きさのものもあり或は五百由旬のものもあるが各々その中で諸々の快樂を受けること恰かも切利天のやうである」とあつて「苦しみ」はないらしいです。また何故に胎生と化生との區別があるかと云ふことをお經には「佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智を了せず、此の諸の智に於て疑惑して信ぜず。然れども猶ほ罪福を信ずるを以て善本を修習して浄土に生ぜんと願ず。この諸の

衆生彼の宮殿に生じて壽五百歳まで常に佛見ず經法を聞かず菩薩等の聖衆を見ず。この故に之を胎生と謂ふ」と云つて居ります。これで見ると念佛はしないが因果の道理は信じて居るから色々の善事はして居る。そしてこの善事を回向して浄土への往生を念願して居る人を云つて居ります。之で果して浄土への往生が出来るかどうか、お經では胎宮往生を許して居るけれども、それは老婆心であつて嚴密に云つたら許されないのではないでせうか。私から云はせれば此の人は功利主義の人ですから希望はあつても本ものになつて居ないと云ふべきです。假に念佛したとしてもこのやうな人ですから功利的な念佛に相違ありません。五百歳どころか永久に胎宮に居なければならぬこととせう。

大いなる愛

東　し　げ　と

— 大 —
い　な　る　愛

英國進駐軍の少佐として、市ヶ谷の東京裁判にいらがしい日をおくりながらも、佛教に對する熱烈な愛着と日本民族に對する深い愛情から、ロンドンのハンプレーズ氏と呼應して、フツテイスト・ソサイヤティを組織して佛教の世界化運動に献身する一方、戦争以來日本人に失われた慈愛心をよびおこそうと、動物虐待防止會を作つて、新生日本のために多角的な活躍をつづけている、ジョン・プリンクレー少佐こそ、佛教を生活にとりいれ、佛教とともに生きている、新しい型の佛教徒である。その日常生活——一寸とした動作にさえ佛教の教えがにじみ出ているが——は、まったくお坊さんでも及ばない、慈愛にみちた靜かな生活であり。怒りを顔にあらわさず、他人の苦るしみを自らの苦るしみとして感ずる菩薩行が、生活のまゝに成せられていく。これから語る一片の物語は、その中からひろつた一挿話にすぎない。少佐の全貌は、他に語る人もあるし、私自身もまた他日を期している。しかし、この一挿話の中にさえ、我々日本人を反省せしめる教訓が寶石のように光つてゐる。

血は英國人であつても、日本で生れた少佐は、日本を愛し日本民族に希望をいだく點では、どの日本人にも負けない。太平洋戦争がはげしくなるにつれて、狂暴な軍部が在日外人にひどい壓迫を加えはじめた時でも、「僕だけは」と深く日本を信じていた。その胸底には日本に對する愛と、それからほとぼしる日本人への深い信賴が、もえさかつていた。しかし、とめどを知らない軍部の暴虐は、いつ少佐にわずらいをかけるか分らない。當人よりも周囲の日本人の方が心配しはじめた。少佐に幻滅を味わせてはならない。親しい友人は、速かに日本をはなれるように進言した。

「僕は大丈夫だ。軍部にも友人はあるし、僕の思想も立場もよく知つてゐる。」

人を信ずることは知つていても、疑うことを知らない少佐の言ではあつたが、それだけ近しい友人は氣が氣でなかつた。戦況の變化に應じて、外人を敵視し侮蔑する風は、國民の中にひろまつていく。少佐も軍部の横暴には、日本の將來を思うが故に、いたく心痛した。

「このまゝでは日本は滅亡する。私たちもやりきれない。あなたが眞

に日本を、そして私たちを愛するなら、その國籍を生かして英國軍に投じ、一日も早く今の日本をたゞきのめしてほしい。」

ある友人は、とうとうこう進言して、少佐の離國をすすめた。「日本を愛するが故に」そうだ、少佐の心はやつときまつた。幸い英國とも連絡がつき、昭和十七年三月三十一日に印度にむけて出帆したのであつた。

出發に際しても、少佐はこれからの日本の不自由を洞察して、友人たちに靴下やタオルなどをおしげもなく別け與え、必ず日本に歸つてくることを誓つた。しかし、少佐の心を曇らせるものがあつた。日本人の奥さんと、すでにアメリカに歸つてゐる義兄が托していつた四匹の犬である。英國人の妻だといふので、スパイみたいに白眼視されるだろし、しかも四匹の犬を飼つていくことは、とうてい出来ないことだ。食糧が不足だといつて、飼犬をむざんに殺す世の中である。西洋の社會道徳を身につけ、佛教の慈悲に生きる少佐には、奥さんが四匹の犬をかゝえて、世人の冷たい目の中で生きてゆくことを、いや殺される犬のことを考えると、せつかくの決意もにぶるのであつた。

出發の日、犬は別れるのをさとして、身邊からはなれようとしな

い。

「君は犬をつれてどこかへ行つてくれ。その間にたつから……。」

x

あとに残された奥さんの淋しさ、やるせなさ。犬はしよんぼりとして、少佐の歸りを待つてゐる。コトリと玄關に音でもすると、とんでゝいく。奥さんは見るに忍びなかつた。

「もう歸つて來ないのよ。」

四匹の犬を抱いて奥さんは思わず泣いた。少佐の犬の愛し方は格別だつた。いや犬だけではない。その大らかな愛は一木一草にまで及んでいた。戦前、輕井澤に避暑していた時は、散歩には必ず小さなシャベルをもつて出かけた。小供たちがむざんにぬきとりふみにじつた草花を、ちえつけるためだつた。奥さんは、はじめのうちはめんどくさくて、いやいやついていつたものである。少佐はどんな小さな花でも、ていねいに穴をほつてちえつけるのだつた。

「日本人は生物を愛する心がない。これでは立派な國民にはなれない。せつかく咲いた花にもその生命を完うさせたい。」

口にこそ言わないが、心にくりかへしては、土をかけるのだつた。生物を愛し得ない人間に、どうして人を愛する心があり得よう。家畜を殺してはじない國民、花や木を平氣でいためる國民、日本人が、戦争にあえてした慘虐行爲は、深く深く我々の心に根ざしてゐるものではなかつたか。弱い民族に強力にのしかゝつてゆく強がり、ものいわぬ家畜や草木の生命をもぎとる無慈悲な心に通じるものではないか。

奥さんは、四匹の少佐の愛犬をかゝえて、これからどう生活していったものか、あつけない別れであつただけ、傷心はひとしお深かつた。(つゞく)

編集後記

七月のはじめのことであつた。

神保町で都電をおりる時、いつものように全線定期をポケットから出そうとしたら、ない。あわてゝ紙入れをひらくと生憎小さいのがない。困つて事情をうちあげたら氣のいゝ車掌で「今度のつた時に拂つて下さい」とにつこり笑つておろしてくれた。私は感謝の氣持で一ぱいだつた。

のんき者の私は、たぶん定期は家へ忘れたのだらうと、氣にもかけず一日中、あちこちかけまわつて歸つて來た。家中さがしたが見つからない。九月までの全線定期で二三日しか使わず金高にしても三百圓だ。探し出した者には一割の賞金をあげると、子供までかりだして探したがとうとう見つからない。「落したんだわ、しつかりなさいよ」女房はこの前自分が銀座でハンドバックをすられているの

で、そう強くも責められず、しつかりなさいよの叱問も微笑のおだやかさだつたが、子供たちは賞金をもらえないので「落すんなら家の中で落すんだよ」とふくれていた。

ないものはしかたがない、念のため集鴨の車庫でたずねてみたが「一ヶ月の定期ならこんなに届出があります、全線じや出つこありません、三ヶ月、しかも利用しても分りませんからね」との挨拶やむなく一ヶ月の定期をまた買った。

それから四、五日たつてからであつた。私の歸りをまちかまえていたのか女房は玄關をあけると走り出て來て、

「ずいぶん親切な方があるものね、全線定期をわざわざとどけてくれたわよ。」

「えゝ？」

私もおどろいた。出ないものとあきらめていたから……、しかし女房の感激はまた格別である。

「神田橋でひろつたんですつて、やつぱりね。氏名も住所もないので届けようがなく、それに全線だから利用しようかとも思つたけど買つたばかりだし落した人はさぞ困つてゐるんだろうと、發賣した新宿車庫にわざ／＼出かけていつて住所をしらべてきたつていうのよ。今時ちよつと珍らしい人ね。」

「ふん」私もすつかり感心した。道義乏しいこの世の中に、まだこんな立派な人のいるのが、無性にうれしかつた。心が一時に明るくなつた。

「それからまだあるのよ。」名前を言わずに立ち去つたの、是非とお願いをしたけど、當然のことをしたまでです、と逃げるように去つていつたのよ、みすばらしい服装の人だつたけど、全く見上げた人だわね、新聞に書いてあげなさいよ。」私は彼の姿をあれこれ胸にえがいていたが、全線定期は汗ばまれた手にしつかりにぎられていた。そしてこんな親切な心は自分にもあるものかと獨語した。(東)

「浄土」 七・八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿二年 七月二十日印刷
昭和廿二年 八月一日發行

(定價三圓)

東京都芝區芝公園淨土宗務所

編輯兼 中村 辨 康
發行人

印刷人 春山 治部左衛門
東京都神田區神保町三ノ一〇

印刷所 共立社印刷所
東京都神田區淡路町二ノ九

配給元
日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園淨土宗務所

振替 東京 八二一八七番
會員番號 B 一〇八〇一四

會費 金四十二圓
一ケ年

(送料六圓を含む)

振替拂込みはすべて一圓五十錢増のこと